

海上都市構想

最近海上都市構想に興味を持っている。もともと自動車交通を捨てた高密度で低環境負荷の都市を提案していたが(高密度森林都市構想で検索してみてください。)既存の都市を高密度に改造するより新しい都市を海上に浮かべるほうが簡単かもしれないと思い始めた。

海上都市はこれまで菊竹さんが精力的に提案してきているが、バックミンスター・フラーも正四面体状の海上都市を提案している。あまり知られていないが古くはジュールベルヌも浮かぶ海上都市の小説を書いている。今改めて海上都市を提案する気になったのはいろいろ理由がある。人口爆発と地球温暖化である。

今世紀は温暖化問題解決のためにも炭素系の燃料から水素系の燃料に移すべきだと思っているが、海水を太陽エネルギーで分解して水素を発生させる試みがサンシャイン計画以来続けられている。海水には塩素とナトリウム以外にも硫黄やマグネシウム、カルシウムなど多くの元素が溶け込んでいる。それらはエネルギーさえあればまさしく無尽蔵な資源として取り出せる。太陽エネルギーと海水から化学コンビナートができるかもしれない。ということで前号で紹介した名古屋国際都市問題研究会の公開講座で前座として海上都市構想を提案し、機関誌の方にこれをテーマとした小説のようなものを書いてみた。新しい年を迎えるにあたり、2~3回の予定で紹介したい。最初はなぜか飛行船から始まるが。

海上都市と飛行船物語

地球は200億人分の幸せを用意している。

序章 飛行客船「飛鳥」

「お客様にご案内いたします。本船はまもなく定刻より30分早く、沖の鳥島港に到着いたします。到着予定時刻は18時30分。現地の気温は26度。湿度70パーセント……。まもなく左舷前方に沖ノ鳥島市が見えてまいります。お降りのお客様はお支度の上しばらくお待ちください。本日も飛鳥太平洋クルーズをご利用いただきありがとうございました。Your attention please. This ship will soon arrive at Okinotorishima……」

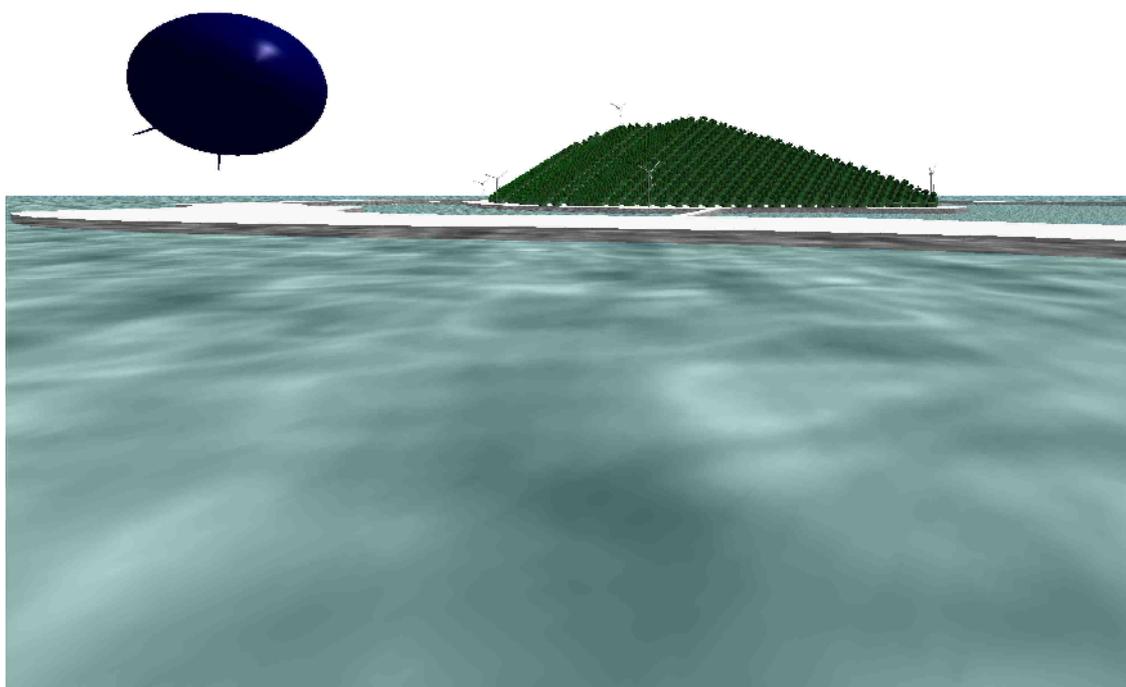
乗客の多くは左舷の展望ギャラリーに移動をはじめた。夕闇にくっきり沖ノ鳥島市の明かりが見える。近づくにつれ、しだいに島全体が海に浮かぶひとつの大きな街であることがわかる。

乗員乗客100名を乗せた、飛行客船「飛鳥」は高度300メートルをたもちながらゆっくりと西に進んでいる。実は60ノットのスピードが出ているのだが、全長300mの巨体のためゆっくりにはしか見えない。最大直径が100メートルもあるので遠く

からみれば高度300メートルはかなりの低空飛行に見える。

飛鳥Xは太陽熱と水蒸気で浮上する新しいタイプの低環境負荷飛行船である。が、その外観はまるでポップアートのようなカラフルなバナー広告の塊である。エンベロープは太陽光の透過膜と熱吸収膜の二重膜構造になっており、航行には吸収膜と広告を彩る色素増感型太陽電池からの電気を使う。がそれはいわば補助動力で、極力順風となる高度を探し風に乗って飛ぶ飛行帆船でもある。太陽エネルギーの紫外線部分を電気に変え、それ以外の領域を浮上用の熱源として100パーセント有効利用している。高度調整には水蒸気分圧をコントロールし、高度を稼ぎたいときはサウナのようにミストを噴出する。エンベロープの最下部には観葉植物に囲まれた小さなプールがあり、水着の男女でにぎわっている。上を見るとオーロラのような七色のカデナリーカーテンが見える。飛行船で最大の部屋は気積容量140万立米のこの天空のサウナであった。

名古屋の金城埠頭飛行船ターミナルを出たのは午後3時だった。東京は夕方の七時発。ナイトクルーズで深夜に八丈島、翌朝に小笠原の父島到着、途中硫黄島を含む火山列島を遠くに見ながら、東京から24時間かけて沖ノ鳥島に到着する。大変人気が高いクルーズである。このあと飛鳥Xは時間調整をして離陸し、深夜に大東島、とびきりの早朝に那覇、そのあと大阪や名古屋を經由して午後5時に東京にもどる。台風が日本列島を通るコースに沿って風に乗るこの帰りのコースはタイフーンクルーズとも呼ばれている。国内旅行なのでパスポート要らず、2日のクルーズで料金は一等でも5万円、もちろん食事がついてる。



第一章 沖の鳥島市

愛知県職員の三田信子は展望デッキから見る沖ノ鳥島市の夕景に見とれた。もともとの沖の鳥島は東西4.5 km 南北1.7 kmの環礁で、自然の地形としては地上部分わずかに1 mほどの岩礁が二つしかなく、波や海面上昇による消失が懸念された。日本はこの島を領土として40万平方キロメートルに達する排他的経済水域を主張していたが、中国はこれは単なる岩礁で国際法上の島には該当しないと主張していた。国際法上の島としての要件を満たすためには、ここに人が住み、経済活動をおこなう必要があった。こうして生まれたのが海に浮かぶ人工都市、沖の鳥島市であった。ところが中国はあれは船であり、国際法上の島には該当しないとの主張をつづけていた。

人工島は東西1 Km南北500 mで環礁の北200 mに隣接して浮かんでいるが、緑に覆われた自然の地形を模しているため、はじめからあった島のようにみえる。中央部は盛り上がり最高部の高さは130 mに達する。山の上は公園になっていて大きな池があり、消え行く空の光を映している。街には意図的なライトアップや広告照明はほとんどないが、全体にぼんやりと明るいのは蓄光材が大量に壁面に使われているせいである。もちろん3万人の人口を有する都市なので、照明がそこかしこに見える。多くはLEDによるものと思われる。よく見ると自然の地形に見えた起伏は柱状節理のような住居ユニットの集まりでできていた。植栽がそれを森のように覆っている。

海岸沿いは島を一周する椰子の並木通りになっていて、レストランやショップが建ち並んでいる。毎日繰り返される光景とはいえ、何人もの人が椰子の木ごしに空を見上げる。空から眺めると島の沖合い数百メートルのところで外洋の波が白く砕けているのが見える。本来の沖ノ鳥島のさんご礁ではないさんご礁のようなものが島の沖合いをぐるりと取り囲んでいるのだ。このせいか島の周りの海は非常におだやかである。

島の周りに大きな護岸はない。干潮満潮の差はないのだ。この島は海に浮かんでいるのだから。浮かんでいるといいことはほかにもある。この島には地震がない。人工の環礁を含めると1平方キロメートルを超えるこの島は台風でもほとんど揺れなかった。

島のシルエットにはまだ特徴的なことがあった。山頂近くと島の周辺部に8機の巨大なプロペラが見える。本土でもよく見かける風力発電機であるが、それが発電のためだけでなくことを三田は知っていた。平時には発電装置だが、逆に電力を送ってやれば送風装置に変わる。このおかげでこの島は向きを変えたり時速3ノットで航行することができた。もとは伊勢湾内で組み立てられ、多くの住民を乗せたあとタグボートに引かれて湾を出、自力航行でここまで来たのだ。沖合いの環礁は展開構造になっており、外洋で広げられたたと聞く。

この島とそれを取り巻く環礁との間のまるで鏡のような水面にも秘密があった。この島を経済的に支えているある装置が水面下にあるためである。真珠いかだではない。それは新しい時代の水田ともいえる。

次号につづく

海上都市構想

前号までのあらずし、愛知県職員三田信子は太陽熱で浮上する飛行客船「飛鳥X」に乗って沖の鳥島に向かっていった。「飛鳥X」は48時間で大阪、名古屋、東京の各都市から伊豆諸島、小笠原、沖ノ鳥島、大東島、沖縄を経て大阪に戻る「タイフーンクルーズ」と呼ばれる周回コースに就航している。沖ノ鳥島市は人口三万人の文字通の意味で海に浮かぶ人工海上都市で、外観は環礁に囲まれた自然の島のように見える。そしてその礁湖には新しい水田ともいえる秘密が隠されていた。

海上都市と飛行船物語

地球は200億人分の幸せを用意している。

第二章 海洋コンビナート

新しい水田とは太陽光を使って水を酸素と水素に分解する基礎的な人工光合成の装置である。それが水面下10センチのところに潜んでいる。

この水田で作られるのは水素だけではない。海水にはナトリウム、マグネシウム、カルシウム、炭素、硫黄などほとんどの元素が含まれている。なんと金も溶けている。濃度は小さい。しかし海水の量は膨大である。エネルギーも豊富にある。太陽光は地上では一平米当たり1KWの出力がある。これまでの太陽電池は紫外線成分しか電気エネルギーに変換しないためにエネルギー効率が悪かったが、植物は可視光線を使って光合成を行っている。その仕組みが解明され海洋からさまざまな資源が文字通り無尽蔵に取り出せる可能性が出てきた。もちろん天然塩もとれることは言うまでもない。

この沖の鳥島市全体は実験的海洋コンビナートであり、研究開発都市なのである。国際的に多くの企業が参加していた。沖ノ鳥島市も自治体でありながら株式を公開しているひとつのベンチャー企業であった。こういった例が過去にもある。もともと大東島はサトウキビ生産の会社が所有していたし、沖の大東島はいまでも一企業の私有地である。かつて昭和初期には沖ノ鳥島ではない中の鳥島という幻の島を発見したという詐欺騒動もあった。絶海の孤島はお金になるのだ。

沖ノ鳥島市を立ち上げたのは愛知県に本社をおく株式会社 新島工業研究所 英語名 NIMRA (NEW ISLAND MANUFACTURING RESEARCH ASSOCIATION) で、出資者には国や愛知県も名を連ねる第三セクターである。そのため沖ノ鳥島の自然の岩礁は東京都であるが沖ノ鳥島市は愛知県に属していた。今回派遣される三田は愛知県沖ノ鳥島支所のたったひとりの職員である。任期は2年の予定で、バカンス気分で行って来いといわれたが、左遷ではないと信じている。なれたら友達を呼んでわいわいやりたいと思っている。

飛行船飛鳥 は着陸体制に入った。三百メートルの上空から発着場に向かってゆっくりと先端に錘のついた三本のワイヤが下りていく。地上ではそのワイヤを固定しウイン

チで巻き降ろす。まるで水上ステージのように島の北に浮かぶ飛行船ステーションに巨船は係留され乗客はタラップで地上に降り立った。フォークリフトが近づき乗客の荷物が降ろされる。小さなコンテナもいくつか見える。大型貨物は週一便のカーゴ飛行船で来るが、日々の日用品の多くは飛鳥で来る。飛鳥Xは島の暮らしを支える貨客船でもある。

三田はトランクを受け取ると到着ロビーに出た。「ようこそ沖ノ島島市へ ホテルサンセット」という旗をもったおばさんが笑顔で待ち構えていた。

第三章 ホリゾンタルエレベータ

おばさんは「あと二人おいでるでまっとってね」といった。みんなそろったところで「ようおいりゃーした。これからご案内しますで。まあエラかったでしょう。」とおばさんはだれかのトランクを持つわけでもなく、動く歩道に案内した。ここの公用語が名古屋弁だとは聞いていた。

動く歩道沿いには観覧車のかごのような丸い乗り物が数台並んでおり、中の一台のLEDが点滅していた。乗り込むとそこは対面座席でふたりの先客が居た。おばさんの顔見知りらしかった。おばさんはなにやらカードを読み取り機にかざした。すぐにドアがしまり乗り物は音もなく滑り出した。本土でも珍しくなくなったホリゾンタルエレベータ、通称ホレレである。全自動超伝導リニアで垂直から水平まで自由に動ける。最高速度は18Kmであるが分速にすれば300mでエレベータとしては最高速の部類である。一本のエレベータシャフトに何台も入るし、エレベータ同士の追い越しもできる。縦に丸い形状をしているのは超伝導リニアの駆動部分が真下から真上まで360度回転しても客席は常に水平を保つ機構のためである。

飛行船ターミナルを出る時はその駆動部分は下にあり、普通の車のようであったが軌道は途中でループを描き、ターミナルと街を結ぶブリッジ部分では懸架式のモノレールのようになっていた。そのまま二階の高さで海をわたり本島につくと建物の中に入っていた。二階の高さから見る景色はなんだか懐かしい気がする。魂が飛ぶ高さだからと聞いたことがある。

島は50階建てのひとつの巨大なドーム建築であり、ひとつの都市であり、船でもあった。ドームとなる外皮の部分は六角形を基本とした三層のメゾネット居住区で、柱状節理に見えたのはこれだった。その内側にはホレレの軌道を含む動線部分とアゴラと呼ばれる巨大な内部空間があり、運動公園になっている。ナイターテニスをしているのが見えた。

運動公園の上は広いトップライトになっている。飛行機から見た大きな池は天水のため池になっているのだが底がガラス張りになっているようだ。山上公園の街灯が揺らいで見える。

ホレレの軌道は三層に一層の割合で回っていて、各戸の前でとまる。ドアツードアで

ある。ホレレには人を運ぶ乗用タイプと、各戸に宅配便や水やエネルギーを供給するサービスタイプがある。人を乗せるタイプは6人相乗りが原則で、オンデマンドで最適経路を自分で判断して走る。直角に曲がるコーナーも多くそのたびに一度停止するので、最短経路が必ずしも最速経路ではない。最適経路とはもっともエネルギー消費の少なくなる経路らしい。

エネルギーもホレレで供給されると書いたが、主に水素をマグネシウム水素吸蔵合金の形で供給している。この水素を各戸の燃料電池に入れると電力を取り出すこともできる。この際熱も出るのでお湯をわかせる。LEDと蓄光照明が普及しているおり、気温は一年を通じて温暖であるため家庭のエネルギー消費量は非常に小さい。最大の電力消費はヘアドライヤーであるということだった。

飲料用や洗浄用の上水は清潔なタンクで供給される。トイレ用などの中水は各戸で天水を備蓄するシステムになっている。同じサービスホレレが廃棄物の回収も行う。このような各戸に備蓄のあるシステムは災害にも強い。サービスホレレは夜間を中心に活動する一種のロボットであった。サービスタイプの中には消防活動専用のものや救急タイプのものもあり、この島には自動車は一台もないということだった。島の一ヘクタールあたりの人口密度は400人と高密度であったが、これには自動車交通を一切排除したことが大きく貢献していた。普通の地上の都市は自動車を走らせるために存在しているようなものである。この島の最速の交通手段は実は自転車です。内側にも外側にもスロープがある。

ホレレは途中で二人の乗客を降ろして島の北西最上層近くのホテルについた。島の北東側にも同じような100室規模のホテルがあり、こちらはホテルサンライズというらしい。ここは最近観光客にも人気だそうだ。

おばさんの案内でフロントでかぎをもらい、とりあえずチェックイン。「ごゆっくり」と言う声に送られてホテル内の専用ホレレに乗り込むと自動的に部屋の前でとまる。部屋は48階で窓の外には見渡す限り夜の海がひろがっていた。ちょうど時間調整を終えた飛鳥が赤くライトアップされてゆっくり浮上するのが見える。泊まっているときでもてっぺんほとんど同じくらいの高さだったはずで、こうしてみるとこの島よりでかいのではないかと思うくらいである。ステーションからのライトアップには夜間の浮上のための遠赤外線照射が含まれている。

飛鳥はかすかな風切音を残して西の空に消えていった。

次号に続く

前号までのあらすじ、愛知県職員三田信子は太陽熱で浮上する飛行客船「飛鳥X」に乗って沖ノ鳥島市に着いた。「飛鳥X」は48時間で大阪、名古屋、東京の各都市から伊豆諸島、小笠原、沖ノ鳥島、大東島、沖縄を経て大阪に戻る「タイフーンクルーズ」と呼ばれる周回コースに就航している。沖ノ鳥島市は人口三万人の文字通りの意味で海に浮かぶ人工海上都市で、外観は環礁に囲まれた自然の島のように見える。そしてその礁湖は太陽エネルギーと海水からマグネシウムなどさまざまな資源を取り出す海洋コンビナートだった。信子は水平にも動く超伝導エレベータ「ホレレ」に乗って島の高層階にあるホテルサンセットにつき、部屋から飛び立つ飛行船を見送った。

海上都市と飛行船物語 地球は200億人分の幸せを用意している。

第四章 ゼロエミッション

飛行船に見とれていると携帯の着信音がした。沖ノ鳥島市総務課長の中村からメールが入っている。お出迎えにいけず済みません。となっているがこちらからお断りしたのだ。着いた夜からお仕事はしたくない。明日は中村課長に案内されて島を回るはずだ。

三田はこの島のコンビニに興味があった。うわさでは本土から物質電送で送られてくるものがあるという。それは情報だけが送られてきて、島で取れる原材料を使って三次元プリンターで生成されるものだ。オンデマンド出版の製品版だといえる。

し尿処理施設にも興味があった。三万人分の排泄物は島の西にある礁湖で海産物に替わると聞いている。さっき使ったトイレは航空機のトイレに似ていて、あまり水がでないのに空気音とともにさっとなくなっていく。聞くところによると固体と水分に分けられ水分の多くは中水としてトイレに再利用されたり、庭などにまかれる。固体は一定量がカプセルに入り、そのままメンテナンス用の水平エレベーター(ホレレ)で運ばれるらしい。下水管という不衛生なものがこの島にはないのだ。

カプセルの中には純粋培養された特殊な蛆が仕込まれていて、固形物を食べて成長する。一週間もすると固形物は無臭の肥料に変わり、成長した蛆虫は自分で這い出してくる。これはそのまま魚や鳥のえさになる。まわりの礁湖の一部ではそれらを利用した魚の養殖や、海草の栽培が行われている。

たしかに昆布など海草は光合成の効率が高い。二酸化炭素の削減には効果的で、三万人の食糧自給ができてもおかしくない。ゆくゆくは地球には200億人の人間が住むことになるだろう。この沖ノ鳥島市の実験は200億人を支える技術として世界から注目を集めている。地球温暖化で遠からず水没するミクロネシアやポリネシアからの視察も増えてきた。考えれば沖ノ鳥島は世界に先駆けて水没しているのだ。21世紀は世界中の造船所が都市を作る時代になるのかもしれない。

晩御飯を食べに行く時間は過ぎているのだけれど動くのが面倒だ。ホテルの最上階に展望レストランがあるらしいが高そうだ。あまりおなかも空いていない。飛行船の中では船内レストランがバイキングだったので意地汚く食べ過ぎた。とりあえずシャワーだけ浴びて自販機の冷えたビールでも飲んで寝よう。明日は早く起きて島を散歩しよう。すべては明日だ。

飛行船から見えた池のある山上公園にいったみたかった。ハンサムな男の子に会える気がする。池でイケメンなんちって。思わず親父ギャグを口ばしる三田であった

第五章 招かれざる客

三田信子がホテルで飛鳥を見送っていたころ、空港送迎デッキから同じ飛鳥 X の離陸を見送っている男がいた。

男は飛鳥 X に密航してきたのだった。東京を出るとき早めにクルーズの貨物作業員を装って乗り込み、トイレですばやく着替えた。

下船の際のチェックは乗船時とちがって、ないに等しい。飛鳥 X は国内便なので当然パスポートのチェックもない。まんまと到着ロビーに降りそこから送迎デッキに回った。到着客だと思われるといろいろな面倒なので、送迎の人に紛れ込んで一緒に市内に入るつもりだった。

男の名は阿多慶、中国から留学ビザで日本に入国し、コンビニでバイトばかりしていた。そこでこの島の話聞いた。なんでも中国に対抗するためにできた人工島で、各国の一流企業の研究者が多く住んでいるそうだ。お金持ちばかりでセキュリティもあまり厳しくないらしい。もぐりこんでしまえばいろいろいいことがあるに違いない。東京にいる間にネットで情報を集めた。この島にもコンビニが 10 軒以上ある。きっと時給は高いに違いない。

さらには美術館も科学館も図書館もある。大学もある。いろいろ金目の物もあるかもしれない。企業秘密も満載にちがいない。この島の写真をいっぱい撮っておけば本国の情報局にきっと高く売れる。なにしろ 3 万人が暮らす都市である。特に発電所の位置、上水道の様子などは重要な情報のはずだ。

今日泊まる場所は別に決めてないが、なあにネットカフェくらいあるだろう。お金はないが、おなかはいっぱいだ。飛鳥 X のなかでバイキングを腹いっぱい食べた。ついでに缶ビールも 4, 5 本こっそりバッグに詰めて来た。

・・・そういえばとろうと思ったケーキを先にもってった女がいたな。こっちの顔を見て、ピースサインかなんかだしやがった。かなり酔ってたんじゃないの。まあこっちもだけど。

地味目のスーツだったけど、わりといい女だったかもしれない。ていうか、かなりいい女だった気がしてきた。そのときは色気より食い気に走っていたので、ケーキを取られたほうがしゃくだったけど。まあすぐまた出てきたからよしとしよう。あの子もここ

でおりたんだろうか。だとするとまたあえたらいいな。

などと思っていると、みんな次々に丸い形の変な乗り物に乗り込んでいく。まるで観覧車のゴンドラが横に動いているみたいなかんじだ。なにやらカードを読み取り機にかざしている。どこかにあれを売っている券売機があるのだろうか。見回しても見当たらない。

「スミマセン、ソレ、ドコニウツテマスカ」と乗ろうとしているにいるおばさんに聞いてみる、わざとたどたどしい日本語で。日本人は基本的に外国人には親切だ。

ところが「えっ」と驚かれる。この島の人間はみんな持っているはずで、よくわからないけど空港の係員に聞いてみればという。どうやら ID カードのようなものらしい。ご親切に近くの係員に声をかけたものだから、それらしきひとがやってきた。ちょっとややこしいことになってきた。

「どうされましたなも。」「あーえっと、歩いて町には行けませんか?せっかく良い宵なので」とできるだけあやしくない日本語に切り替える。「ああ酔い酔いね。それでしたら、その先の階段を下りられると、すぐ下の階の出口からプロムナードにつながります。海沿いをまわるんで結構かかるかもしれんがなも。」どうもありがとうとって早々に立ち去ろうとする阿。数歩離れたところで「あーそうそう」と呼び止められる。「これもってきゃー」といって島の案内図をわたされた。そのとき画像が撮られたことに阿は気がつかない。

プロムナードはマングローブの間を縫っていて野趣たっぷり、というか手入れがあまりされていない。頭の上をさっきの観覧車のゴンドラが通り過ぎていく。

人影はあまりなく、たまにであうのはカップルばかり。時々ジョギングをしている人や、犬を連れて人とすれ違う程度だ。潮の香なのだろうか中国の海辺とはかなり違った、なにやら濃密なかがりが漂ってくる。なれてしまえばそんなに不快なおいではない。

10 分ほど歩いて本島にたどりついた。海岸沿いは椰子の並木のひろい通りになっていて、野外にショップが軒を連ねている。レストランもある。夜でもビーチで泳いでいる人もいる。

ようしとりあえず潜入に成功だ。と思っていると向こうから警備員風の男が近づいてくる。自分に向かってきているような気がしたので、とっさに向きをかえて建物の中に入ろうとする。と目の前で、開いていたドアが突然閉まった。後ろから警備員が近づいてくる。「すみません。カード見せてもらえんですか。」阿は振り向きざまに走って逃げた。

次号に続く

前号までのあらすじ、愛知県職員三田信子は太陽熱で浮上する飛行客船「飛鳥X」に乗って沖の鳥島市に着いた。「飛鳥X」は48時間で大阪、名古屋、東京の各都市から伊豆諸島、小笠原、沖ノ鳥島、大東島、沖縄を経て大阪に戻る「タイフーンクルーズ」と呼ばれる周回コースに就航している。沖ノ鳥島市は人口三万人の文字通りの意味で海に浮かぶ人工海上都市で、外観は環礁に囲まれた自然の島のように見える。そしてその礁湖はあふれる太陽エネルギーと海水からマグネシウムなどさまざまな資源を取り出す海洋コンビナートだった。信子は水平にも動く超伝導エレベータ「ホレレ」に乗って島の高層階にあるホテルサンセットにつき、部屋から飛び立つ飛行船を見送った。

そのころ同じ飛行船の密航者、阿多慶は島に不法侵入しようとして、警備員に制止され逃げるのだが。

海上都市と飛行船物語 地球は200億人分の幸せを用意している。

第五章 ID カード

阿多慶は振り返らずに逃げた。海岸通りは買い物客や、観光客で混雑していた。何人かの人とぶつかりそうになる。荷物を落としそうになるおばさん。急ブレーキをかける自転車を避けて、階段を駆け上がる。昔映画で見たような、家並みの間を縫って坂を上ってゆく階段状の道だ。三階分ほど上がって振り返ると、海岸と夕暮れの街なみが見える。先ほどの警備員は、見当たらない。

背後で何か気配がする。映画ではいつのまにか警備員が回りこんでいたりするのだが、と思いながら、振り返ると猫だった。近づくと逃げていく。また距離をおいてこちらを見ている。

気にしないで階段を上ることにする。階段に面して多角柱状の家が建ち並んでいる。みんな海に面する庭があり、東屋やパーゴラのある家もある。カーテンから明かりが漏れている。

ところどころに島の内部空間に通じていそうな通路もあったが、入るのはためらわれた。また急にドアが閉じるに決まっている。あの警備員はカードを見せろと言った。みんなが乗り物に乗り込む際にかざしていたカードだろう。あれはどうやらこの人工島都市の住民や正規の観光客が持っているIDカードのようなものらしい。多分あれが無いと中には入れないのだ、ちょっと面倒なことになってきた。

しばらく急な階段状の道を上がると、5mくらいの幅のある斜路に出た。家の方は六角柱なので境はぎざぎざになっているがスロープはなだらかだ。道に面して窓があり、たくさん花が飾られている。通行人はまばらだ。知らない人ばかりのはずだが、たまに

挨拶をされる。ときおり自転車が下りて来る。

振り返ると先ほどの猫がいる。ポケットを探すと飛行船のバイキングでくすねたチーズがあった。しゃがんで、差し出すと恐る恐る近づいてくる。とっさに捕まえる。ちよっと抵抗したが、抱き上げるとおとなしくなる。猫でも抱いていたほうが住民っぽく見えるに違いない。お前名前はなんていうんだ。ミャー?、名古屋弁かて。まあミャーとしかいえないわな。

この道はどこに続くのだろう。まあどおにかなるさ。阿はまたゆっくり歩き始めた。

第6章 山上公園

信子は夢を見た。長い夢だった。飛行船から降りようとするりだが、降り口がわからない。船内を探しまわっていると、後ろから呼び止める人がいる。それは良く知っている人のようだが、思い出せない。格好は飛行船のクルーのようだ。手を引いて降り口まで案内してくれる。無事下船してお礼を言おうとすると、もう消えている。

降りたところは広い湖だった。なぜかもう自転車に乗っている。その湖はとても浅い。まるで水溜りのような深さなのに、延々とどこまでも広がっている。水しぶきをたてて自転車で走るととても気持ちよい。遠くにバラ色に輝く山が見える。気がつくといっぱいいっしょに走る人がいる。みんな高校の同級生だ。そういえばこんな感じで自転車通学していた。さきほど手を引いてくれた人もいる。手を振っている。え、そうだったんだ。青木君。信子は少し胸がキュンとなる。

そこで目が覚めた。

ここは・・・、沖の鳥島市のホテルだ。時計を見る。まだ朝の5時前。起きてレースカーテンを開けると見渡す限り海が広がっている。うわー。と信子は小さく声をあげる。バルコニーに出てみると昨日の飛行船ステーションが見下ろせた。夕方の一便だけしかないのでもまだ静まり返っている。ときおり海鳥の鳴き声がする。

ひとわり見渡すと、部屋に戻りテレビをつけた。大半のチャンネルは日本本土と変わらない。このテレビはネットにつながる。メールのチェックをする。なにやらいっぱいメールが来ている。ワーニングと書いてあるのもある。どうせよくあるウィルスのアラートくらいだろう。アラートを装ったウィルスというのもある。

とりあえず朝のシャワーを浴びる。ナチュラルっぽい短パンとタンクトップに着替えて、フロントに行く。常夏というのは良い事だ。

朝飯前に少しお散歩をしよう。とりあえずあの山上公園。フロントで簡単な地図を渡される。ホテル前の屋内からホレレでも行けるのだが、外に出て歩きたい。

一旦ホテルの外部玄関から階段を下りるとゆるやかな斜路に出る。それをそのまま上がっていけば、この島で一番高い海拔150mの山上公園に出る。本当に一番高いのはその公園に立っている風力発電タワーで200mを超える。おもわず見上げてしまう。今日は風が無いので止まっている。

公園の中央に池がある。池といっても水深は5センチくらいしかない。朝見た夢を思い出した。でもそんなに広くは無い。長さ40m幅15mくらいの楕円形、名古屋の栄にあるオアシス21を思い出す。覗き込むと水の揺らぎの下に広場が見える。下は100m以上もある吹き抜けになっている。ふとザディアフタートゥモローのワンシーンを思い出した。凍りついたニューヨーク近郊、雪原だと思っているとそれは大きなショッピングセンターの屋上で、そりが吹き抜けのトップライトを突き破ってしまう。

ちょっとこの上を自転車で走る気にはなれないなと思っていると、ねこがやってきた。まだ子猫のようだ。信子を見上げて、みゃーとなく。おーおー、ちゃんと公用語しゃべるんだ、えらいえらい。といって頭をなでるとおとなしくしている。そのまま抱き上げて歩く。池の端に東屋がある。人が寝ている。ねこは急に降りたがり、その人のところに走って行って上にちょこんと乗る。信子は覗き込む。どこかで見た顔だ。ほんとに池面でイケメンってか。昨日のオヤジギャグを口走る。

どこか夢に出てきた青木君ににているけど別人だ。そばに飛行船の中でしか出ないという缶ビールが転がっている。そうだ昨日飛行船の中で会った気がする。こいつもいっしょの飛行船で来たのだ。どういう出会だったかよく思い出せない。

全然動かない。まさか死んでないよねー。でもどおやって確認したらいいんだろう。ドクターランプのあれちゃんみたいに木の枝でつんつんとかするのだろうか。とりあえずこいつの写真をケイタイでとっちゃえー、ということで上からぱしゃっとやると。目が開いた。

あっとおどろく阿。きみは昨日バイキングのケーキとったやつ。そこで信子も思い出した。ベンチにならんで座りなおして、おしゃべりする。イケメンとまでは行かないがブサメンではない。まんざらでもない信子であった。

中国から来た留学生で一人でぶらっと来たんだけど、IDカード落として中に入れなかったと言う。

ほんとう?なんかあやしいやつだな。でもカードならあたし二枚持ってるよ。ホテルでもらった観光客用のカードとこちらに着任するというので中村課長が郵送してきたやつ。観光客用のやつ君に上げるよ。これでしょう。というところそうこれこれという。ケーキのおわび。

いいとこだな、ずっとこんなところに住めたらいいなと阿は言う。住んじやいなよ。あたしこう見えても、実はこの島の行政官だから、君一人くらいなんとでもしてやるよ。と大見得を切る信子。新任だけどとりあえずこいつなら子分にできそうだ。ということでケイタイの番号を交換して別れたのだった。

信子はまだこのときまだ自分のしたことに気づいてはいない。最初に気がついたのはホテルをチェックアウトするときだった。なにこの見覚えの無い請求額は。そうかあIDカードにはこういう機能があったのね。

(以下、次号に続けようかどうしようかなー。)

海上都市と飛行船物語 地球は200億人分の幸せを用意している。

さりげなくタイトルが変わりました。連載第5回?

阿竹 克人

前号までのあらすじ、愛知県職員三田信子は太陽熱で浮上する飛行客船「飛鳥X」に乗って沖の鳥島市に着いた。「飛鳥X」は48時間で大阪、名古屋、東京の各都市から伊豆諸島、小笠原、沖ノ鳥島、大東島、沖縄を経て大阪に戻る「タイフーンクルーズ」と呼ばれる周回コースに就航している。沖ノ鳥島市は人口三万人の文字通りの意味で海に浮かぶ人工海上都市で、外観は環礁に囲まれた自然の島のように見える。そしてその礁湖はあふれる太陽エネルギーと海水からマグネシウムなどさまざまな資源を取り出す海洋コンビナートだった。信子は早朝の散歩で行った島の最頂部の公園で、同じ飛行船に密航してきた中国人留学生、阿多慶に出会うのだが。

第七章 多慶の一日目

信子と別れた阿多慶はもらったIDカードを持って、おそろおそろ公園から島の内部に通じるエントランスを通った。何も起きない。ほっとして振り返ると昨日の猫もいる。「おまえはIDカード要らないの?便利だね。」また抱き上げて歩き出す。

島の内部にはは巨大な吹き抜けで、どこに照明器具があるのかよくわからなかったが、不思議と明るかった。見上げるとトップライトになった池の裏側が見える。これ以外にも通路や階段にはガラスブロックが埋まっている。よく見るといろんなところから太陽光線が入るようになっているようだ。木漏れ日のような光に満たされた巨大な内部空間の広がりは何となく空洞地球説を思わせる。はるかな下を見下ろすと公園や広場が多いものの、意外に普通の建築が建ち並んだ普通の町並みに見える部分も多い。学校らしきものも見える。

内部にも緩やかなスロープがあり、昨日空港で見たゴンドラが路面電車のようにスロープの横をゆっくり動いていく。まだ早朝だがぼちぼち通勤時間かもしれない。

あのゴンドラにこのカードがあれば乗れるはずだ。どうすればいいのだろう。前から空のゴンドラがやってくるのでためしに手を上げてみる。止まらない。カードを出して振ってみる。止まらない。行き過ぎてしまうと思った瞬間、だれかが

「ちょっとまちゃー」と言った。

ゴンドラはとまった。振り返るととめたのはオバサンだった。

「よそから来たお方だね。ホレレは言葉がわかるんだがね。・・・乗り方わかるかね。」

「あ多分大丈夫です。このカードをここにかざすんですよね、ホレレていうんすか。」

「ほーだよ。ホリゾンタルエレベータの略だがね。」

「この猫も大丈夫つすか」

「えーよ。ほんで、どこにいきたいの。」

「そーすっね、おすすめは？」

「こいつに島案内させりゃええがね。聞きゃーどこでも行ってくれるでね。」

「じゃーそのまえにとりあえずコンビニに。」という

「こんななかから選んでね。」と突然ホレレがしゃべるのでびっくりする。

見るとディスプレイ上の地図にコンビニが10軒ほど表示されている。点滅しているマークはどうやら現在地らしい。

とりあえず一番近そうなところを押して出ようとするとおばさんがにこやかに笑って

「今晚よかったらこやー、まけたるで」

とって「ホテルサンセット宿泊優待券」というのをわたされる。

近くのコンビニで、ホレレと猫を待たせてとりあえずサンドイッチとコーラを買う。現金は一万円以下だったので心細かったが、レジでカードを出してといわれる。ここでカードといえばあのカードかと思って出すと、それでお金を払わなくて良いと言われる。狐につままれたような気がしたが、怪しまれてもいけないと思って何も聞かなかった。

ただレジ係の女性が変な顔をするので、レジを見ると10代女性というところにランプがついていた。

ホレレの中でコーラを飲みながら考えた。

10代女性って何?・・・これは元はといえば三田信子っていったっけ、彼女のIDカード。

「そうか、・・・あいつ、歳サバ読んで登録したんだ。」

「じゃ次どこに行こうかあ? 美術館なんかお勧めだよー。」

そういえば、ホレレが多慶に話しかける言葉もなんとなくくすぐったい。

「名古屋弁しゃべるんとちゃうんかい。」と関西弁ですごむと黙ってしまった。

そのあと一日ホレレに人工島巡りをさせて、ケータイで写真を撮りまくった。ホレレはときどき相乗りになったけれど相手は女性が多かった、おばさんばかりだったが。

夜ようやくたどり着いたネットカフェでも、通されたブースの周りは女性が多い気がした。どうやらカードのご利益らしい。このカードを使えば朝のおばさんのホテルにもタダで泊まれそうな気がしたけれど、表示であやしまれそうなのでやめたのだ。

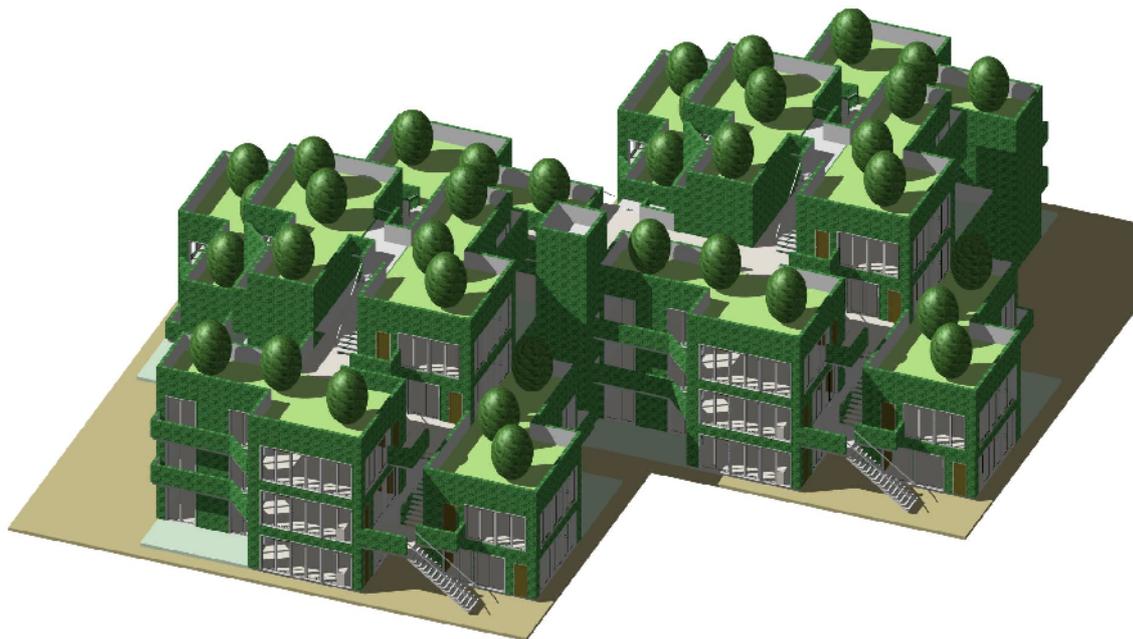
ネットでいろいろチェックする。今日取った画像を見してみる。上水場はよくわからなかったがあの上公園の池だろう。ちょっと水量が少ない気もするが。さて寝るか。

島はせまいけどネットカフェのブースは東京より広がった。

第八章 信子の一日目

信子はとりあえずホテルから出勤。ホレレで愛知県沖ノ鳥島市分庁に向かう。といっても沖ノ鳥島市役所の一角にとりあえず間借りをしているだけだ。市役所もこじんまりして

いる。島内部の下層階にあり内部の広場に面していて海は全く見えない。良い眺望の部分
はそれを生かせるよう、優先的に住居や店舗になっているのだ。



沖ノ鳥島市役所?

前任者からの引継ぎはすでに本庁で済ませた。市役所の玄関では中村総務課長が待ち構えていた。愛知県では名古屋市は規模で県庁とタメを張っているが、それ以外の市町村は基本的に県に頭が上がらない。

法令の関係で県の所轄事項になっているものがいろいろあり、県の出先機関も要るのだが、大半は本庁のコンピュータが自動的に処理してくれる。住民もわざわざ出先機関に向かなくてもネット上で解決してしまうことが多い。信子はまあ、現地の状況を見ただけで本庁に報告することと、苦情処理、あと公式行事に出たり、国や海外の自治体が来た際のお相手をするいわば雑用係りである。といっても本当に大事な用は本庁からもっと偉い人が飛んでくる。

信子の仕事のひとつは県警や保健所との連絡であった。愛知県警沖ノ鳥島支所はコンパクトではあるがそれなりの体制をとっていた。といってもこの島ではこれまで交通事故はほとんどない。自動車が無いからだ。海の事故はたまにあるがそれは海上保安庁の管轄だ。

強盗殺人などの凶悪犯も全くない。窃盗はあるが観光客がらみのものばかりだ。当然ながら暴力団もない。それ以外の業務といえば遺失物の監理とか、軽犯罪法違反程度のものである。

ときどき不審者の情報はあった。国際的に注目されているので、テロの警戒は怠らなかつた。島内の人物は観光客を除いてほぼすべての情報が一元的に管理されている。

中村課長は五十がらみ。しげしげと信子を眺めて

「いやあプロフィールの写真よりずっとおきれいですなも。」という。セクハラオヤジだ。若い子に言われたらセクハラにならないのだが。あるいはせめてオヤジではなくオジサマと呼べる容貌であれば。しばらくご挨拶のあと。

「ところで、昨日不審者情報があったんでメールでお送りしといたんですが。みられなかったですか。なも。」

「ジャンクが多いんで見落としかも知れんかなも。」信子の名古屋弁は変だ。

なんでも昨日島の警備員を振り切って逃げた男がいて、どうやら特徴から空港で道を探ねた不審人物と同じらしい。そのシャムを見せられた。あいつ、阿多慶だ。今県警で画像をもとに犯罪者リストを検索しているという。

「一応ご連絡したまですでが、お気をつけて。なも。なんでもテロ情報もあるとかで。」

不審者。たしかに不審者には違いない。しかし着任早々うっかり不審者に ID カードを差し上げたなどと口が裂けてもいえない。

午前中は庁内の挨拶まわり。午後島の行政の出先機関をまわる。小さいのですぐ終わる。

この沖ノ島島市はほとんど株式会社新島工業研究所の企業城下町というか、企業の所有物になっている。県の機関というのは出先の工業研究所くらいしかない。中村課長とまわったのは、下水処理場や廃棄物処理施設、あと小中学校の場所を聞いて外から見たくらい。島全体が高密度なので、小学校は 2 校だが中学は 1 校だけ。県立高校も 1 校ある。大学は私立。

島の中核部分の多くは株式会社の私有地あつかいで、行政の職員といえども簡単には立ち入れないようだ。

今日は金曜。明日引越し荷物が官舎に届く、といってもたいした量ではない。そしたらホテルをチェックアウトして官舎に移る。引越し先も案内してもらったが、基本的にホテルの客室とよく似ている。設計者が同じ CAD データを使いまわしたのだろう。ただ階数は低い。といっても 20 階くらい。

夕方県警に例の不審者のその後の情報提供を求める。少なくとも国際犯罪者データベースではヒットしないようだ。

そして次の朝のチェックアウトで、身に覚えのない請求額が上がっていたわけだ。カードの返却を求められたので紛失したといって届けを出すことにした。被害額はまあ五千円くらいのものだが。

「あいつまだ島にいると思うんだけど。うーん、どうしよう。」

とりあえず県警に連絡を入れることにした信子であった。危うし阿多慶。

(次号に続く)

海上都市と飛行船物語 地球は200億人分の幸せを用意している。

連載第6回

阿竹 克人

前号までのあらすじ、愛知県職員三田信子は太陽熱で浮上する飛行客船「飛鳥X」に乗って沖の鳥島市に着いた。「飛鳥X」は48時間で大阪、名古屋、東京の各都市から伊豆諸島、小笠原、沖ノ鳥島、大東島、沖縄を経て大阪に戻る「タイフーンクルーズ」と呼ばれる周回コースに就航している。沖ノ鳥島市は人口三万人の文字通りの意味で海に浮かぶ人工海上都市で、外観は環礁に囲まれた自然の島のように見える。そしてその礁湖はあふれる太陽エネルギーと海水からマグネシウムなどさまざまな資源を取り出す海洋コンビナートだった。信子は早朝の散歩で行った島の最頂部の公園で、同じ飛行船に密航してきた中国人留学生、阿多慶に出会い、不用意にIDカードを渡してしまう。不正使用の形跡があり県警に連絡を取る信子だったが。

第九章 ネットカフェ蜂の巣

信子は110番ではなく昨日名刺交換した愛知県警沖ノ鳥島署の田中という担当者に電話した。まだ若いのに髪の毛に不安のありそうな男性だ。

「あっ、あの、昨日お目にかかった愛知県沖ノ鳥島支所の三田といますが、あの、実は携帯電話を紛失しまして、……遺失物のとどけの課ですか、それは見つからなかったら提出しますが、

とりあえず電波の出ているところがそちらで分かるのではないかと思うのですが……。

そうなんです、鳴っているのは分かるんですが、どなたも出られないんです。

もちろん規則でそんな捜査情報漏洩みたいなこと簡単にできないのは分かっているんですけど、そこをね。お願い。困ってるの……。

あっ、ありがとうございます。

いえ場所さえ分かればこちらから取りに行きますから。そのケータイ番号ですか。えっと。」

信子は田中に山上公園で交換した阿多慶の番号を告げた。

それが実は不審者の電話番号で、着任早々軽率にもその男に自分のIDカードを渡してしまって、不正使用で被害が出たなんて、絶対にいけない。

あと、あのIDカードに年齢を10歳もサバ読んで入れたのもちょっと知られたくない。

阿に直接電話することも考えたが、そんなことをしたら逃げられてしまうかもしれない。ここは自力解決あるのみ。そんなに危険なやつにも見えなかったし。

位置分かったらかけ直しましょうか?といわれたが切らずに待つことにした。ケータイなくしたはずなのでこのケータイにかけ直してもらうのは変でしょう。

待つことしばし、発信位置が分かったという。

「そうですか、分かりました。ええ、ええ行きました。あのお視察で。わかります。

そうですね。よく考えたらそこしか考えられない。あたしってドジ。

見つかったらまたなんかお礼しますね。

ほんとありがと。」

女は得だ。

電波の出ている場所は島の南東にある「カフェ蜂の巣」という名前のネットカフェということだった。もちろん行った事など無い。

「変わった名前ねえ。」

阿はブースで目を覚ました。ここのブースは六角形をしている。そういえばここの名前は「蜂の巣」だった。この島の建物のプランは六角形だらけだ。おかげで通路はまっすぐ通らない。

ソファがゆったりしているのでけっこう快適だ。東京のネットカフェを渡り歩いていると腰を痛めてしまう。

とりあえずドリンクバーから熱いコーヒーを取ってくる。パンは別料金だけど、最後にこのカードを使えばいいわけだ。これって結局、三田っていったっけ、昨日の彼女の所に請求が行くんだろうな。いつか分からないけど。しーらないと。

コーヒーを飲みながらネットチェック、この島の中のアルバイト情報はほとんど無い。隣町の情報って小笠原？ そりゃそうだけど日本でこんなに遠い隣町もあまりない。この島にも大学生がいるはずでみんなどうしてるんだろ。

第十章 新島工業研究所

そのころほかにも阿の動きをチェックしている男がいた。新島譲二、株式会社新島工業研究所の創始者で発明家。最近 65 歳の誕生日を迎えたのを機に代表取締役社長を後進に譲って会長に収まっている。新島とは人工島の意味ではなく、トヨタのように単に創始者の苗字だったのだ。

仕事は会社で週に一回いくつかのプロジェクトの進捗状況を聞きアドバイスすること、あとは表向き音楽やボードゲームやフィッシングなど、いくつかの趣味の集まりに参加し、悠々自適の生活。といたいところだが、島ではヌシと呼ばれていて、なんだかんだと引っ張り出される。

家族は名古屋においできた。名古屋や東京に住んでいたらもっと雑事で忙しかったに違いない。仕事を理由にしているが、それがこの人工島に居を定めている大きな理由だった。

株式会社新島工業研究所・通称 NIMRA はこの島を船とすると船体の部分の大半を占めている。上部構造が沖ノ島島市という海上都市になっているといっても良い。船体部分のほとんどは基本的に無人の海洋コンテナートになっていて、海水から太陽エネルギーを使って水素とマグネシウムなどの材料を取り出している。もちろん真水も作られ、中型のタンクやペットボトルなどに詰められ、水平シフトエレベーター通称ホレレによって島内に

配られる。

船体部分の海中に面したいくつかの場所に研究施設が分散していた。窓から環礁部分の下部の海中の景色が見える、

NIMRA では今大きなプロジェクトをいくつも抱えていた。沖ノ鳥島市は最初の大規模な実験都市であったが、さらに大きな海上都市の要請があった。温暖化の進行で海中に没する南太平洋の国が増えている。アフリカの死亡率が低下し、人口爆発も進行している。

さらに化石燃料の枯渇、人口爆発に対応する食糧増産によって引き起こされる砂漠化、灌漑のために黄河も揚子江もミシシッピもみんな枯れ川になってしまった。さすがにアマゾンはまだだが。

人工島は海水と太陽からエネルギーや資源と同時に真水も生産する。それをある方法で内陸に送って砂漠化の進行を食い止めるプロジェクトが進行している。それが現在最大のプロジェクトだ。雲の飛行船プロジェクトと呼んでいる。要素技術はすべてできている。あとは運用体制を確立するだけだ。

新島はちょっと趣味的にこの島にあるゆるやかな監視体制を敷いていた。防犯カメラや盗聴器をあちこちに仕掛けたわけではない。もっとスマートな方法だ。その網に昨日、阿が引っかかった。阿の画像が定期的に送られて来ている。昨晚「ネットカフェ蜂の巣」に泊まったことも分かっている。このネットカフェは島内の多くの企業と同様、新島工業の子会社になっている。

「さてちょっと出かけるとするか」新島は立ち上がった。

第十一章 レストランタベルナ

「蜂の巣」で朝食を終えた阿は今日いきたいところをチェックして、出かけることにした。とりあえずバイト先を探さないと。チェックアウトカウンターに行く途中、螺旋階段を見つけた。上がってみると、そこは普通のカフェレストランになっている。

どうやら同じ経営者が両方の店をやっているらしい。こちらの扉にはカフェレスト「タベルナ」と書いてある。タベルナがどっかの言葉でレストランだと聞いたことはある。

こちらはざっと 30 席ほどの広さ。大きな窓と窓の外に芝生があり、そこにも白い椅子とテーブルが何席か見える。そしてさらにその外側には太平洋が広がっている。客席にはまだ客の姿は無い。

窓に面した一段高い場所にピアノがあった。こういう場所に多い、白い小型のグランドピアノだ。近寄って蓋を開けてみる。鍵はかかっていない。

ポーンと音を出してみる。いい音だ。ついでコードをいくつか鳴らしてみる。悪くない。いつしか気がつく阿はモーツァルトのソナタを本気で弾き始めていた。K332 の Fdur。ソナタアルバムに載っている曲だ。ピアノは子供の頃中国で習った。家はたいして豊かではなかったが、一人っ子なので大切に育てられた。

一楽章を弾き終わると、後ろで拍手がした。60歳はとっくに超えていると見える白いアゴヒゲの男性だ。服から見るとこのオーナーのようだ。

「いやあ上手ですね。なにかポップスとかジャズは弾けませんか」という。しばらく日本に来てから弾いていなかったが、オーバーザレインボウを弾いてみた。意外に指が動く。

また拍手。つい気分がよくなる。

「よかったら、ときどき弾いてくださいよ。アルバイトで、このピアノ僕がたまに弾くだけでね。」

といっておもむろに座りジャズのスタンダード「いつか王子様が」を弾き始める。めちゃくちゃ上手かった。

みゃーという声がして振り向くと昨日の猫「ミャー」がひらりオーナーのひざに飛び乗ってこっちをみている。「うちの猫なんです。」とオーナーが笑っている。ちょっと驚いたがとにかく握手して、階下のカウンターに向かう。

そこで事件になる。IDカードを出すと、このカードは使えませんかと表示される。なにやら届けがでているらしい。店員がちょっと発行元に問い合わせるといふ。まずい。

金額を聞くと1530円、そのカードは人からもらったものなので現金で払うといったが、あなたのIDカードはどうされましたと逆に問い詰められる。

いつのまにかさきほどのオーナーもやってきた。

そこで阿のケータイが鳴る。

「もしもし、あたし。忘れた？ここよ」

振り返ると信子が立っていた。

「たしかにそれあたしがこの人にあげたカードなんです。県職員の三田といいます。あたしがホテルに手配しといたもので、ここの仕組みよく分からなかったんで。彼はあのう、県の臨時職員です。本式のIDカードはこれから発行するんですけど。ほらあなた現金で払いなさいよ。」という。

「いやそれは私もちにさせてください。さっきすてきなピアノを聞かせていただいたお礼ということで・・・申し遅れましたが」といって名刺が差し出される。「えっとこれかな、」どうやら何種類も名刺があるらしい。カフェ蜂の巣オーナー、新島譲二と書いてある。

そこでまた阿のケータイがなる。阿が出ると、「県警の田中といいます」というのでぎょっとする。「あれ、これ三田さんのケータイじゃないの」という。とっさに三田は阿からケータイを取り上げる。「あどうも、ケータイ見つかりました。ありがとうございました。ちょっと人のケータイ勝手に出ないでよ。」と聞こえよがしに言う。

起こったことの意味がさっぱりわからない阿であった。

次号につづく。

海上都市と飛行船物語 地球は200億人分の幸せを用意している。

連載第7回

阿竹 克人

前号までのあらすじ、愛知県職員三田信子は太陽熱で浮上する飛行客船「飛鳥X」に乗って沖の鳥島市に着いた。「飛鳥X」は48時間で大阪、名古屋、東京の各都市から伊豆諸島、小笠原、沖ノ鳥島、大東島、沖縄を経て大阪に戻る「タイフーンクルーズ」と呼ばれる周回コースに就航している。沖ノ鳥島市は人口三万人の文字通りの意味で海に浮かぶ人工海上都市で、外観は環礁に囲まれた自然の島のように見える。そしてその礁湖はあふれる太陽エネルギーと海水からマグネシウムなどさまざまな資源を取り出す海洋コンビナートだった。信子は早朝の散歩で行った島の最頂部の公園で、同じ飛行船に密航してきた中国人留学生、阿多慶と出会い、不用意に渡してしまったIDカードを取り返すべく行ったネットカフェ蜂の巣で、オーナー新島譲二と出会う。彼はこの島のヌシともいえる人物だった。

第十二章 排出権取引

実は三田は少し前にネットカフェについていた。オーナーと阿多慶がレストランタベルナのピアノを弾くのも聞いていた。三田はピアノはあまり自信がなかったが、バイオリンは小さいときから習っていた。大学のオケではコンマス(コンサートマスター)をやらされたくらいの腕前だった。ここにバイオリンがあったらなあ、と思いながら聞いていたのだった。そういえば高校の時あこがれていた青木君もピアノが上手だった。文化祭の余興で、モーツァルトのテンポディメヌエットを合わせたことがある。三田が阿多慶のことを悪いやつだと思えないのは、どことなく青木君に似ているからだった。

改めて新島に名刺を差し出す。

愛知県沖ノ鳥島支所総務部総務課 主任 三田信子

となっている。できたばかりの名刺だが、昨日からずいぶん配った。新島からもらった名刺にはカフェ蜂の巣のオーナーとだけ書かれていた。ひととおりご挨拶をして、ちょっと打ち合わせ事項がありますので、といって阿を離れたテーブル席に誘う。コーヒーを二つ頼む。

「ちょっとあんたどういうつもり、しめて四千八百五十円なりの請求が来てるわよ。内訳いいみましょうか、えーっとホレレの乗車賃、100円が12回、一回100円か、タダじゃないのね。ま、そんなもんか。行き先わっと」

「ゴメンナさい、チョト、ワタシ、ヨクワカラナイ」

「あんた、昨日はもっとずっと日本語上手だったじゃない。こんなところに住めたらいいなとか言っちゃってさあ。いいよ、さっきはあんた助けようと思って、あんなウソついちゃったけど、態度によっちゃ、事件化するよ。」

なんだか、スーパーの万引き犯と、警備担当者みたいな会話だなあと三田信子。「ごめんなさい、本当にごめんなさい、最初はほんつとに知らなかつたんです。まあお金が要らないということは、誰かに請求が行くとはおもつたけど。今あるお金で払います。」

ということで、阿は自分は中国から来た留学生ということになっているけどほとんど不法就労者で、この島には情報収集と観光とバイト探しでふらつと来たこと、お金ははらえるけど、払ってしまうとほぼなくなることなど、実は太陽熱飛行船タイフーンクルーズに密航したことを除いてほぼしゃべつた。

三田は事前に入れた情報と正確に一致したので信用することにした。でもなあ、不審者情報がもう流れちゃつてるし、止めちゃつたカードを持つてたわけだし、どうしよう。と思つていると。

「打ち合わせは終わりましたか?」と新島オーナーが現れた。「このあとご予定はありますか?よかつたら場所を移しませんか?」

二人が連れて行かれたのは、レストランタベルナの特別室のような場所だつた。ウェイターが現れて、さつとケーキと紅茶が出る。

「なんだかお困りのようだつたので、お役に立てるか」といつて改めて差し出された名刺があつた。

株式会社新島工業研究所 取締役会長 新島譲二

「実は、この方の動向はずつとチェックしていたのです。いや、県警とは関係ありません。まあ企業のセキュリティの一環で、失礼ながら経歴等もチェックさせていただきました。」

みゃーと鳴く声がして、ひらりと猫がオーナーの膝に乗る。

「ミャーは実はロボットいやキャットロイドです。この島、妙に猫が多いと思いませんでした?実は 20 匹ほどのキャットロイドがこの島のセキュリティを担当しています。言つてしまうと元も子もないのですが、プログラム化された独自の判断で行動し、目と耳の情報をモニターできる。島の人間で知らない人はもぐりです。あ、もちろんダミーといつか本物の猫もたくさん居ます。ほとんど区別が付かないと思つます。見分けかたは一、内緒です。」

ただただ、恐れおののく二人。

「ところで、お二人は今年の二酸化炭素の排出権は、もう売つてしまわれましたか。もしまだでしたら、よろしければうちの会社で買わせてください。」

実は昨年 2020 年から、二酸化炭素の排出権は各個人に割り当てられるようになったのだ。中にはまだ知らない人もいるが。

もともと排出権取引は、企業が二酸化炭素排出量の削減目標を決め、多く達成した企業が、達成できなかつた企業に売ることができるといつたものだつた。この制度には多くの矛盾があつた。なるべく低い目標を立てた会社が儲かるわけだ。そのほかにもすで

にたくさん削減目標を達成してしまった企業が不利になるという矛盾もある。

というわけでなかなか実効性が上がらず、そうこうするうちにどんどん温暖化は深刻になってきた。先進国に追いついた途上国がどんどん排出量を拡大した結果だ。

平均気温は 21 世紀初頭にくらべてすでに二度近く上昇している。世界人口は 80 億。世界の二酸化炭素排出量は多くの努力にもかかわらず炭素換算でも 100 億トンに達しようとしていた。海面上昇は不思議に進行していなかったが、これは温暖化のおかげで、白い砂漠といわれた南極大陸に逆に降雪が増えた結果とも言われている。ともかく早晩世界規模の温暖化ガス総排出量規制を行う必要があった。

一方で二酸化炭素を排出する権利は一体誰のものか?という議論が高まった。つまりところ地球に生きている人類一人一人が等しく保有するものだというのが、法的に通説となってきた。もちろん法人ではなく、80 億の自然人が所有しているものだ。

ということで、規制対象となる総排出量を総人口で割った値をその年の初めに各個人に割り当てる。とりあえずスタート時には一人一トンとされた。各人は割り当てられた排出量を自由にネットなどで売買できる。

同時に化石燃料は、排出権とセットで無いと販売できないことになった。使う側が手持ちの排出権をつけて買うこともできる。

また化石燃料に次ぐ大きな二酸化炭素の排出であるセメント生産も排出権を買わないと生産できない仕組みになった。コンクリートの原料であるセメントは製造過程で石灰岩(CaCO₃ 炭酸カルシウム)から二酸化炭素を追い出して生石灰(CaO)を作るのだ。

この仕組みが確立して、ようやく二酸化炭素の総量規制は功を奏し始めた。環境保護派の多くの人、二酸化炭素排出権を売らずに、じっと貯める人も多かった。その分二酸化炭素が削減できると信じて。

逆に企業は排出権の調達が間に合わず、借入れを起こすところもあった。どちらも認められていたが、借入れがあまり多すぎると行政指導が入り、活動ができなくなる。

売る人より買う人が多ければ、市場原理で排出権相場は高騰する。いまや一トンの排出権は二万円くらいで取引されていた。各個人は年頭に二万円くらいのお金をベーシックインカムとして受ける権利を持ったことになる。

先進国ではこの金額はたいした金額ではなかったが、途上国ではおおきな貧民救済の財源となった。一家で 10 万円あれば一年暮らせる国もある。このお金を元手に商売を始めて、産業振興に役立っている国もあれば、人々が働かなくなって逆に貧しくなる国もあった。人々の無知に付け込んで安く買い叩いてまわる排出権メジャーも現れ始めた。

また生まれたばかりの子供にも与えられると、人口増加に拍車をかけるという指摘もあった。現行では一歳に達した後の年頭ににあたえられることになっていたが、七歳に改めようという動きも出ていた。

「お二人の排出権は?」

「あたしは貯めています。一応環境保護派なので」と信子。

「そんなものがあるとは知らなかった。」と多慶。

「もし、ご家族の分もあるなら、それも含めてぜひ買わせてください。」

「すぐにお金がもらえるのですか?」

「二万円くらいが相場なので、相場を確認してお支払いしてもいい。でも私としてはそれを弊社の株でお支払いしたいのですが・・・。」

調べていただければ分かるのですが、弊社の株は今市場では一株五万円くらいです。それを排出権一トンと交換しませんか。悪い話ではないと思いますが。」

急な話なので戸惑う二人。

「実は、この島に住んでいる三万人のうち半分以上の人が、弊社の株主です。株主には配当のほか、この島ではいろいろと株主優待が受けられます。」と駄目を押す新島。

「あたしはちょっと株主はまずいかなと、仮にも監督カンチョーの人間ですから。」

「これは大変失礼をしました。」なかなか見かけによらずしっかりしたお嬢さんだ、市の役人と大違いだと思う新島。

「阿さんはいかがですか、その、大変申し上げにくいのですが、弊社の株主ということになっていただければ、当面の身分保障はできますが・・・。」

「あとですねー。うちは配当がすごい。なんとっていまやマイクロソフトを上回る超優良企業ですから。この島で暮らしている株主の多くが配当と優待だけで生活してる。十年で元が取れると言われている。それがあなた一年分の排出権料と引き換えなんですよ」「お願いしまーす。」と一も二もなく頭を下げる阿多慶。

その特別室にもアップライトのピアノがあった。しかもその上にはバイオリンが乗っている。三田はこの島には練習用の電気バイオリンしか持ってこなかった。思わず「触ってみてもいいですか。」と聞く信子。「どうぞどうぞ好きなだけ弾いてください」

なんとそこにはモーツァルトのホ短調ソナタの楽譜が。思わず新島を見る信子、微笑む新島。

新島の思惑通りか、阿とのデュオになった。初見に近いはずなのに見事なアンサンブル。新島が「では私はこれで」というのでお開きになった。

バイオリンはいい音がした。「安物だけどよろしければお貸しします」と新島。

「ま、これくらいいいかなー」と受け取る三田。「まさか盗聴マイクとか仕込んでないだろうなー。」

別れ際、三田が阿に言った。「えーっと、とりあえず、月曜の午後、庁舎に来てね。四千八百五十円働いて返してもらうから、臨時職員君」

(次号に続く)